

在する入居者を見渡せる、かつ入居者が職員を見ることが出来る位置関係である。「視覚外」とは、入居者の集まりなどから離れた場所に職員が滞在し、職員がデイに滞在する入居者を見渡せない、かつ入居者が職員を見ることができない位置関係である。また入居者との行為関係を「身体介助」・「交流」・「間接関わり」の3項目に分類した。「間接関わり」とは職員の直接介護業務以外の行為である。

次に事例をいくつか挙げる(図-11)。「集まり—身体介助」とは、職員が集まりの中で入居者に介助を行うことである。事例のように2人の入居者に食事介助を同時に行ったり、他の入居者に声かけを行いながら入居者の食事介助を行っているなど、必ずしも1人への介助とは限らない事例も観察された。「視覚内—間接関わり」では、職員はケース記録を付けている。しかし時々入居者の方を見たり、入居者の発した言葉に反応するなどケース記録を付けながらも入居者の様子を窺っている。このことは「集まり—間接関わり」でも同様である。「視覚外—間接関わり」では、職員が入居者を見渡せない場所で衣類を収納ケースにしまっている。定時行動観察では記録できなかったが、調査時間中に入居者が手を挙げて訴えるが、職員が気づかないため何度も入居者が訴える事例が観察された。

このように「間接関わり」とは、職員が直接介護で入居者と関わってはいないが、集まりや視覚内に滞在することでいつでも直接関わる事ができる可能性を秘めている。また、事例のように職員がテレビを見る、食事をする、ぼんやりする行為も観察された。これらの行為は業務というよりも入居者と同様の行為であり、入居者と共に生活する職員の生活行為と言える。職員が入居者のそばで共に生活行為を行うことは集団処遇である従来型の施設では難しい。集団処遇では流れ作業的に業務が行われ職員に余裕が生まれず、家庭的環境の整った小規模のユニットケアならではの行為であると思われる。

職員の滞在場所を元に各施設での「位置—行為」

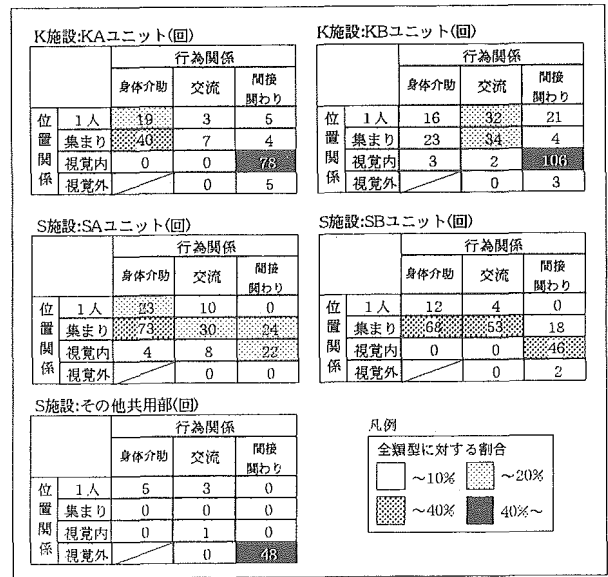


図-12 各施設の職員の関わり類型の集計

による職員の関わり類型を図-12に示す。属性の影響を最も受ける身体介助は各ユニット入居者の属性によるばらつきが大きい。

K施設とS施設では職員の関わり類型に大きな違いがみられる。K施設ではS施設に比べて集まりでの関わりが少なく、1人での関わりが多い。これは家具配置や職員の職員体制が影響していると考えられる。K施設では入居者にとって居場所がS施設より多く設けられていることで、入居者が1人であることが多くなる。そして入居者に対する職員数が多いために、職員が集まりだけでなく1人である入居者にも間接関わりを持つことができる。また、入居者にとっての多様な場所が職員にとって入居者と直接関わらなくても視覚的に関わる事が可能な場所となっている。

#### D. まとめ

ユニットのつなぎ方や職員体制の異なる2施設の調査を通して、入居者の生活と職員の介護、特に職員の関わり方の考察を行った。

(1)ユニットのつなぎ方(独立型・連結型)に関わらず、入居者のほとんどは自分の所属ユニットで生活している。入居者の移動能力にもよるが、独立型、連結型ともにユニット内に適切に居場所が設け

られていることが影響しており、ユニットケアの特徴が示された。

(2) 職員の滞在状況は職員体制に影響を受ける。1職員チームが1ユニット担当する体制では職員がユニットに全く不在となることは少なく、1職員チームが2ユニットを担当する体制では職員がユニットに全く不在となり、他ユニットに職員が集まることが多くみられた。しかし限られた職員のなかで業務にあたるため両ユニットで協力して業務を行うことが不可欠である。また、両施設とも通常の勤務時間を1時間ほど超過して勤務していた。以上からユニットケアを推進する上で、入居者に対する職員数の増員など職員体制の改善が示唆された。

(3) 入居者との「位置—行為」関係を軸に職員の関わり方を類型化した。ユニットのつなぎ方や職員体制によらず、観察された職員の関わり方の約4割は直接関わりではなく「間接関わり」である。ユニットケアではこの「間接関わり」と職員の滞在場所が重要であり、必ずしも集まりにいらなくても、適度に物理的距離を保ちつつ視覚的に関わることも特徴としてみられた。このためにも多様な場所・ゆとりのある空間・十分な家具などが必要である。

(4) ユニットのつなぎ方や職員体制を問わずユニットケアでは入居者と共に食事をしたり、テレビを見るなど入居者と同じような生活行為を行いながら入居者と間接的に関わっていることが観察された。この生活行為による「間接関わり」は必ずしも介護業務とは言えない。ユニットケアでは単に業務として入居者と関わるのではなく、入居者と共に生活しながら関わる職員体制が求められる。職員が入居者と生活しながら関わることは職員数の増員によって職員に時間的な余裕が生まれ、さらに促進できると考える。

(5) 職員の関わり類型は空間の条件や職員体制によって影響を受ける。ユニット内に多くの居場所が設けられている独立型では、職員は入居者の集まりで関わるだけでなく、入居者1人での滞在でも関わ

りは多く行われる。また、ユニット内で入居者にとっての多様な居場所が、職員にとって入居者と直接関わらずに視覚的に関わるのが可能な場所となっている。両ユニット全体として多くの場所が設けられている連結型では職員は集まりで入居者と関わるが多く、「間接関わり」の場所が少ない。さらに1職員チームが1ユニットを担当する職員体制では、入居者1人での滞在でも入居者のそばにいて時間を過ごす間接関わりが可能である。しかし、1職員チームが2ユニットを担当する職員体制では直接関わりができて、「間接関わり」は難しい。

### E. 今後の課題

本稿では、ユニットのつなぎ方と職員体制の異なる2施設の比較を通して、ユニットケアにおける入居者の生活と職員の関わり方を明らかにした。今後は職員に精緻な追跡調査を行うことによって、さらにユニットケアの有効性を検証することを課題としたい。

#### 註

- 1) 文2)によると独立型・連結型以外にこれらを組み合わせた混合型がある。
- 2) 以下のように分類する。

行動分類	行動の詳細	行動分類	行動の詳細
関わり行動	入居者と会話	意識的でない行動	独り言
	スタッフと会話		何気ない行動
	共同作業	寝る	
	介護	その他	
意識的行動	テレビ	不明	その他
	その他見る		ユニット外
	個人的行動	不明	
	飲食		
	生理的行動		
	整容		
手伝い			
移動			

#### 参考文献

- 1) 外山義他、ユニットケアのすすめ、簡井書房、2000年8月
- 2) 林悦子他、施設ケア改革への試み—グループケアユニットの可能性、シルバーウェルビジネス、42-49、2000年5月

厚生科学研究費補助金（21世紀型医療開拓推進研究事業）  
分担研究報告書

痴呆性高齢者のための環境評価尺度とケア評価尺度の開発と適用に関する研究（1）  
－痴呆性高齢者への環境配慮と痴呆ケアの関連性の分析－

分担研究者	潮谷有二	長崎純心大学助教授
主任研究者	児玉桂子	日本社会事業大学教授
分担研究者	下垣 光	日本社会事業大学専任講師
研究協力者	秋葉直子	日本社会事業大学大学院
研究協力者	東原知子	長崎純心大学

本研究では、特別養護老人ホームにおける痴呆性高齢者に配慮された専門的環境と援助者の援助行為との関係をみるために、痴呆性高齢者専門的ケア尺度を独自に作成し、潮谷ら（2001）が開発した痴呆性高齢者環境配慮尺度との関係について、九州圏内の特別養護老人ホームの職員を対象に検討を行うことを目的とした。

因子分析の結果、痴呆性高齢者専門的ケア尺度は、15個の測定項目と「利用者の興味をふまえた援助」、「利用者の人間関係と周辺環境の調整」、「自立への支援」の3つの因子によって構成される尺度であり、痴呆性高齢者環境配慮尺度を独立変数、痴呆性高齢者専門的ケア尺度を従属変数とする重回帰分析の結果、痴呆性高齢者環境配慮尺度のうち、「プライバシーの確保への支援配慮尺度」と「入居者とのふれあいの促進への支援配慮尺度」との間に強い関係がみられ、専門的環境と専門的な援助行為が独立ではないということが示唆できた。

A. 研究目的

システム理論や生態学モデルからも明らかのように、生活のありようをみると、人と環境の相互作用は、決して不可分な存在ではない。

周知のとおり、高齢者福祉施設における住環境は、利用者に対するサービスシステムの一つとして非常に重視されてきており、例えば、米国においては1990年代以降、痴呆性高齢者のための Therapeutic Environment としての Assisted living や Special care units などの議論に代表されるように、痴呆性高齢者の施設住

環境に関する研究が進められてきている。また、これらの痴呆性高齢者のために整備された専門的な施設環境を評価するための尺度開発が行われている。その代表的尺度として、Therapeutic Environment Screening Scale (TESS, Sloane & Mathew, 1990; 1991) や TESS-2+ (Sloane, et al., 1995)、Professional Environmental Assessment Protocol (PEAP, Weisman et al., 1996)、Nursing Unit Rating Scale (NURS, Grant, 1996)、の3つの尺度をあげることができる。これらの尺度は、専門的な施設環境を物

理的環境およびプログラムの両面から痴呆症を有する人のニーズに対する環境によるサポートの程度の測定に焦点が当てられている点にその特徴がある（松永，2001）。日本においても児玉桂子（2001）による研究の一環として、潮谷ら（2001）によって PEAP や NURS の測定次元や測定項目を参考に、日本の特別養護老人ホームに適用可能な多次元尺度による痴呆性高齢者に対する環境配慮の実施度を測定する痴呆性高齢者環境配慮尺度の開発がおこなわれ、これにより施設における専門的な環境を測定することが可能となった。

ところで、社会福祉施設における人と環境の関わりに目を向けてみると、そのレベルを便宜的に「人と人」のレベルと「人と人以外」の2つのレベルに大別することができる。また、「人と人」のレベルは「利用者と利用者」と「利用者と援助者」のレベルに、「人と人以外」のレベルは「利用者与人以外」、「援助者与人以外」のレベルにそれぞれ分けることが可能である。そして、入所型の社会福祉施設では、これらの人と環境の無数の組み合わせとそれらのダイナミックな相互作用により、施設生活が構成されているといえよう。特に、施設内の援助者に着目し、援助者という個人をシステム論の立場から施設内における最も原子的なサービスシステムとして捉えてみると、援助者は環境との相互作用によって、利用者に必要となるサービスをアウトプットしていると考えられることできる。

そこで、本研究では、援助者と利用者の双方にとっても重要な環境となる痴呆性高齢者に配慮された施設の専門的環境に着目し、特に援助者と専門的環境との関係に焦点をあて、援助者がサービスとしてアウトプットしている痴呆性高齢者に対する専門的援助行為を測定する尺度として痴呆性高齢者専門的ケア尺度を独自に作成し、専門的環境との関係性について検討する

ことを目的とした。

尚、いうまでもなく、本来システム論や生態学モデルを志向した場合、相互作用の問題から時間概念を含む分析モデルの設定が必要となるが、本研究では相互作用ではなく、最も単純なレベルとしての相関関係で人と環境の関係を捉えたため、クロスセクショナルなデータを用いて分析を行っている。したがって、そのような意味での研究上の限界があることをあらかじめお断りしておく。

## B. 方法

### 1. 調査対象者及び調査方法

九州圏内の特別養護老人ホームすべてに調査協力依頼を送付し、調査協力の得られた 69 施設のそれぞれにおける痴呆性ケアの中心となる寮母・寮父・指導員の計 1,086 名を調査対象者とした。

調査方法は、平成 13 年 11 月 16 日から平成 13 年 11 月 30 日までの間に、質問紙を用いた自計式の郵送調査を実施し、最終的に 316 票を回収（回収率 29.0 %）した。尚、本研究では、分析に用いる変数のすべてに欠損値がない 223 票を分析対象とした。

### 2. 測定方法

(1) 痴呆性高齢者専門的ケア尺度（以下、ケア尺度という）の測定は、まず痴呆性高齢者環境配慮尺度（潮谷ら,2001）の各次元について、当該次元から想定されるサービス機能を導きだし、その機能を充たすための職員の援助行為を設定し、33 個の測定項目を独自に作成した。そして、それぞれの項目について、「いつもしている」に 4 点、「ときどきしている」に 3 点、「あまりしていない」に 2 点、「全くしていない」に 1 点を与え、測定を行った。

(2) 痴呆性高齢者環境配慮尺度（以下、環境配慮尺度という）の測定方法は、先行研究の結果をふまえて設定された、①「安全と安心への支援」の次元、②「見当識への支援」の次元、③「機能的な能力への支援」の次元、④「環境における刺激の質と調整」の次元（尺度 A と B に分割）、⑤「生活の継続性への支援」の次元、⑥「プライバシーの確保」の次元、⑦「自己選択への支援」の次元、⑧「入所者との触れ合いの促進」の 8 つの次元について測定する 50 項目それぞれについて、「かなり実施されている」に 4 点、「まあまあ実施されている」に 3 点、「ほとんど実施されていない」に 2 点、「全く実施されていない」に 1 点を与え、測定を行った。

### 3. 分析方法

分析方法は次の手続きに沿って進めた。

①調査対象者の基本属性の分布について明らかにした。

②痴呆性高齢者専門的ケア尺度の 33 個の測定項目それぞれについて、平均値、標準偏差、歪度、尖度等の統計量を算出し、各々の項目の分布から測定項目としての適正について検討した。尚、その際に、歪度、尖度（正規分布の場合は 0.0 に調整してある）の絶対値が 1.00 を越える項目、を分析除外対象項目とすることを原則とした。

③ケア尺度を作成するために、分布に偏りがみられた項目を除いて因子分析を行い、抽出された因子に対する因子負荷量の最大値が 0.4 未満の項目を分析から除外し、因子負荷量の最大値が 0.4 未満の項目がなくなるまで再度因子分析を行うという作業を繰り返し実施した。尚、因子分析は、主因子法による因子軸の抽出を行い、

因子数は固有値 1.0 以上とし、因子軸の回転にはバリマックス回転を用いた。

④ケア尺度得点の尺度得点および次元別に環境配慮尺度得点と信頼性係数（Cronbach's  $\alpha$ ）を算出し、得点の分布と内的整合性の検討を行った後、ピアソンの積率相関係数を算出し、尺度間関係について検討した。そして、ケア尺度得点を従属変数、環境配慮尺度を独立変数とする重回帰分析をステップワイズ法によって行い、従属変数に対して、影響を与えている独立変数について探索的に検討した。

## C. 結果

### 1. 調査対象者の基本属性

回答者の属性は、表 1 に示すとおりであり、年齢の平均が 37.69 歳 (S.D=11.23)、性別は男性が 22.4 %。女性が 77.6 %、最終学歴は高校卒が 61.4 %、短期大学卒が 17.0 %、大学卒が 10.3 %の順に多く、福祉系専門教育歴が有るものは 26.9 %であった。

職種は、寮母・寮父職が最も多く 83.4 %、次いで生活指導員職が 7.6 %であった。現在の施設での勤務年数の平均は 6.43 年 (S.D=5.47)、他施設での就労経験が有るものは 17.0 %、他施設での就労経験の平均は 3.72 年 (S.D=3.13)、保有する資格は、介護福祉士が 50.7 %、ホームヘルパーが 24.4 %、社会福祉主事任用資格が 20.7 %の順で多かった。

表1 調査対象者の属性

	度数 または平均 値	比率 または 標準偏差
年齢(n=215)	37.69	11.23
性別		
男性	50	22.4%
女性	173	77.6%
最終学歴		
中学	11	4.9%
高校	137	61.4%
短期大学	38	17.0%
大学	23	10.3%
その他	3	1.3%
無回答	11	4.9%
福祉系専門教育歴		
ある	60	26.9%
ない	146	65.5%
無回答	17	7.6%
資格		
社会福祉主事任用資格(n=213)	44	20.7%
社会福祉士(n=213)	6	2.8%
介護福祉士(n=213)	108	50.7%
看護婦(n=213)	19	8.9%
作業療法士(n=213)	0	0.0%
理学療法士(n=213)	0	0.0%
介護支援専門員(n=213)	24	11.3%
ホームヘルパー(n=213)	52	24.4%
特に資格なし(n=213)	28	13.1%
その他(n=213)	18	8.5%
勤務年数(n=218)	6.43	5.47
職種		
生活指導員	17	0.0%
寮母・寮父	186	0.0%
その他	19	0.0%
無回答	1	0.0%
他施設勤務経験		
ある	38	17.0%
ない	177	79.4%
無回答	8	3.6%
他施設勤務年数(n=37)	3.72	3.13

## 2. ケア尺度の得点分布

ケア尺度 33 項目の平均値は 2.02 から 3.59 の範囲に、標準偏差は 0.64 から 0.96 の範囲に、歪度は-1.55 から 0.55 の範囲に、尖度は-1.14 から 1.65 の範囲にあった(表2)。歪度もしくは尖度の絶対値が 1.0 を超えた項目は、項目 05、項目 11、項目 19、項目 24、項目 31、項目 32 の 6 項目であり、これらの項目を分析から除外

することにした。

表2 ケア尺度の測定項目の分布

項目	最小値	最大値	平均値	標準 偏差	歪度	尖度
項目01	1.000	4.000	2.978	0.719	-0.186	-0.461
項目02	1.000	4.000	2.121	0.782	0.526	0.131
項目03	1.000	4.000	2.969	0.907	-0.376	-0.869
項目04	1.000	4.000	2.466	0.889	0.064	-0.715
項目05	1.000	4.000	3.587	0.678	-1.547	1.654
項目06	1.000	4.000	2.839	0.839	-0.150	-0.751
項目07	1.000	4.000	3.152	0.796	-0.605	-0.289
項目08	1.000	4.000	2.946	0.676	-0.466	0.632
項目09	1.000	4.000	3.031	0.932	-0.636	-0.524
項目10	1.000	4.000	2.780	0.860	-0.074	-0.827
項目11	1.000	4.000	2.686	0.963	0.086	-1.143
項目12	1.000	4.000	2.143	0.938	0.436	-0.686
項目13	1.000	4.000	2.022	0.813	0.516	-0.154
項目14	1.000	4.000	3.152	0.867	-0.552	-0.837
項目15	1.000	4.000	2.561	0.851	0.096	-0.644
項目16	1.000	4.000	2.973	0.838	-0.413	-0.509
項目17	1.000	4.000	3.040	0.785	-0.523	-0.101
項目18	1.000	4.000	3.368	0.691	-0.716	-0.307
項目19	1.000	4.000	3.489	0.670	-1.046	0.279
項目20	1.000	4.000	2.982	0.838	-0.383	-0.601
項目21	1.000	4.000	2.924	0.799	-0.290	-0.495
項目22	1.000	4.000	2.762	0.795	-0.469	-0.040
項目23	2.000	4.000	3.511	0.643	-0.966	-0.156
項目24	1.000	4.000	2.099	0.636	0.551	1.098
項目25	1.000	4.000	2.534	0.914	0.060	-0.812
項目26	1.000	4.000	2.794	0.871	-0.040	-0.938
項目27	1.000	4.000	2.610	0.893	0.124	-0.840
項目28	1.000	4.000	3.439	0.668	-0.968	0.557
項目29	1.000	4.000	3.121	0.821	-0.425	-0.875
項目30	1.000	4.000	2.444	0.830	0.299	-0.466
項目31	1.000	4.000	3.511	0.670	-1.128	0.427
項目32	2.000	4.000	3.682	0.579	-1.658	1.713
項目33	1.000	4.000	2.677	0.807	0.136	-0.697

## 3. ケア尺度の因子分析の結果

分布に偏りが見られた 6 項目を除き因子分析(主因子法、因子数は固有値 1.0 以上、バリマックス回転)を行った結果、7つの因子が抽出されたが、抽出された因子に対する因子負荷量の最大値が 0.4 未満の項目が見られたため(表省略)、それらの項目を分析から除外し、因子負荷量の最大値が 0.4 未満の項目がなくなるまで再度因子分析を行うという作業を 5 回繰り返

した結果、最終的に 15 個の測定項目から 3 つの因子が抽出された (表 3)。

因子名については、それぞれの因子に属する測定項目の内容から、第 1 因子を「利用者の興

味をふまえた援助」、第 2 因子を「利用者の人間関係と周辺環境の調整」、第 3 因子を「自立への支援」とした (表 4)。

表 3 ケア尺度の因子構造 (バリマックス回転後)

	第1因子	第2因子	第3因子	共通性
項目06	0.747	0.196	0.225	0.646
項目04	0.670	0.225	0.033	0.501
項目02	0.629	0.111	0.030	0.409
項目07	0.494	0.402	0.203	0.447
項目08	0.485	0.370	0.032	0.373
項目20	0.468	0.245	0.335	0.392
項目25	0.459	0.182	0.135	0.262
項目17	0.294	0.730	0.080	0.626
項目18	0.290	0.598	0.242	0.501
項目01	0.372	0.596	0.099	0.503
項目14	0.178	0.550	0.239	0.391
項目23	0.036	0.528	0.273	0.355
項目10	0.258	0.452	0.135	0.290
項目29	0.190	0.196	0.791	0.699
項目28	0.090	0.270	0.749	0.641
因子寄与	2.766	2.636	1.635	
因子寄与率 (%)	18.439	17.570	10.902	
累積寄与率 (%)	18.439	36.010	46.912	

表 4 ケア尺度の因子負荷量と測定内容

第1因子「利用者の興味をふまえた援助」	因子負荷量
項目06 痴呆を持つ利用者の興味のあることを、施設内での活動や役割などに生かしている	0.747
項目04 週2・3日は痴呆を持つ利用者が庭やベランダに出て、季節感や自然の空気を感じられるようにしている	0.670
項目02 週2・3日は痴呆を持つ利用者が花や植物に触れられるようにしている	0.629
項目07 痴呆を持つ利用者の生活歴や興味のあることを、他のスタッフと情報を共有している	0.494
項目08 痴呆を持つ利用者自身の思い出の品や写真を話題に取り入れた会話をしている	0.485
項目20 施設内にあるデイルームやラウンジなどを利用して、痴呆を持つ利用者同士の交流を図っている	0.468
項目25 痴呆を持つ利用者が食事などの時間がわかるように、声掛けだけでなく、準備の音、匂いなどの言語以外の刺激を意図的に利用した働きかけを行っている	0.459
第2因子「利用者の人間関係と周辺環境の調整」	因子負荷量
項目17 痴呆を持つ利用者とは痴呆を持たない利用者の会話がスムーズになるような、働きかけを行っている	0.730
項目18 痴呆を持つ利用者同士の人間関係に気を配っている	0.598
項目01 痴呆を持つ利用者になじみのある時代や文化を反映したものを利用者との会話の中に取り入れている	0.596
項目14 日常のレクリエーション活動には、痴呆を持つ利用者の意思を尊重して、参加したりしなかったりの選択ができるように、利用者の意向を確認している	0.550
項目23 一人の痴呆を持つ利用者に接しているときにも、他の利用者が視野に入っている	0.528
項目10 痴呆を持つ利用者のプライベートな話を聞くとときには、他の入居者がいないところに場所を移すようにしている	0.452
第3因子「自立への支援」	因子負荷量
項目29 痴呆を持つ利用者が、なるべく自分で入浴できるように支援している	0.791
項目28 痴呆を持つ利用者が、なるべく自分でトイレを利用できるように支援している	0.749

#### 4. ケア尺度得点の分布と内的整合性

15 個の測定項目の合計点によって測定される尺度をケア尺度として、分布の特性と尺度の信頼性係数は表5のとおりであり、歪度、尖度ともに分布に大きな偏りがないことを示しており、信頼性係数の値からも十分な内的整合性を

有しており、尺度としての適正が高いことがうかがえた。また、因子分析の結果、抽出された因子に属する測定項目をもとに、下位尺度を作成し分布の特性についてみたところ、3つの下位尺度ともに分布に大きな偏りも見られず、信頼性係数の値も高かった（表5）。

表5 ケア尺度の分布

項目	測定項目数	最小値	最大値	平均値	標準偏差	歪度	尖度	信頼性係数( $\alpha$ )
ケア尺度得点	15	23.000	60.000	44.430	7.247	-0.331	-0.311	0.880
利用者の興味をふまえた援助	7	8.000	28.000	19.040	3.987	-0.285	-0.018	0.819
利用者の人間関係と周辺環境の調整	6	8.000	24.000	18.830	3.274	-0.435	-0.298	0.807
自立への支援	2	2.000	8.000	6.561	1.367	-0.662	-0.101	0.801

#### 5. 環境配慮尺度得点の分布と内的整合性

環境配慮尺度の得点を次元別に算出し、分布の特性と信頼性係数の値を見た結果、歪度や尖度の値は分布に大きな偏りがないことを示していたが、信頼係数の値をみると、環境配慮尺度3、環境配慮尺度4、環境配慮尺度6の値が.70

以下であり、尺度としての内的整合性があまり充分ではないことがうかがえた（表6）。また、理解を容易にするため、合計得点を項目数で除した値の平均得点を見てみると、環境配慮尺度3の値が最も低く、潮谷ら（2001）の結果とも同様の傾向が見られた。

表6 環境配慮尺度の分布

項目	測定項目数	最小値	最大値	平均値	標準偏差	歪度	尖度	得点/項目数の平均得点	信頼性係数( $\alpha$ )
環境配慮尺度1	6	7.000	24.000	16.610	3.219	-0.203	0.206	2.768	0.757
環境配慮尺度2	7	7.000	28.000	17.112	3.906	0.118	0.235	2.445	0.776
環境配慮尺度3	6	6.000	24.000	12.157	3.370	0.365	0.348	2.026	0.595
環境配慮尺度4-A	3	3.000	12.000	8.516	1.825	-0.398	0.442	2.839	0.681
環境配慮尺度4-B	5	5.000	20.000	13.206	2.837	-0.095	0.087	2.641	0.744
環境配慮尺度5	7	7.000	28.000	19.480	3.831	-0.269	0.076	2.783	0.807
環境配慮尺度6	5	5.000	20.000	14.381	2.660	-0.442	0.492	2.876	0.657
環境配慮尺度7	6	6.000	24.000	13.762	3.296	-0.004	0.053	2.294	0.715
環境配慮尺度8	5	5.000	20.000	13.148	3.219	0.002	-0.112	2.630	0.812
環境配慮尺度1:	安全と安心への支援配慮尺度								
環境配慮尺度2:	見当識への支援配慮尺度								
環境配慮尺度3:	機能的な能力への支援配慮尺度								
環境配慮尺度4-A:	環境における刺激の質と調整への配慮尺度-A								
環境配慮尺度4-B:	環境における刺激の質と調整への配慮尺度-B								
環境配慮尺度5:	生活の継続性への支援配慮尺度								
環境配慮尺度6:	プライバシーの確保への支援配慮尺度								
環境配慮尺度7:	自己選択への支援配慮尺度								
環境配慮尺度8:	入居者とのふれあいの促進への支援配慮尺度								



## 6. 尺度間の関係

表7に示すとおり、ピアソンの積率相関係数を算出し、環境配慮尺度とケア尺度の関係を見たところ、環境配慮尺度3とケア尺度との関係は  $r=.246$  とあまり強くなかったが、それ以外の尺度との関係は  $r=.300$  以上であり、特に環境配慮尺度5 ( $r=.510$ )、環境配慮尺度6 ( $r=.552$ )、環境配慮尺度8 ( $r=.567$ ) との間には  $r=.500$  以上の関係がみられた。また、環

境配慮尺度と3つの下位尺度との関係を見てみると、「利用者の興味をふまえた援助」と「利用者の人間関係と周辺環境の調整」では、環境配慮尺度との間に  $r=.200$  以上の関係がみられた。しかし「自立への支援」では、環境配慮尺度1、環境配慮尺度2、環境配慮尺度3との関係が  $r=.200$  未満と弱く、環境配慮尺度1、環境配慮尺度2、環境配慮尺度3との関係は希薄であった。

表7 環境配慮尺度とケア尺度の相関関係

	ケア尺度		興味・・・援助		人間関係・・・調整		自立への支援	
環境配慮尺度1	0.333	***	0.338	***	0.274	***	0.124	n.s
環境配慮尺度2	0.372	***	0.452	***	0.218	**	0.129	n.s
環境配慮尺度3	0.246	***	0.253	***	0.213	**	0.057	n.s
環境配慮尺度4-A	0.337	***	0.354	***	0.208	**	0.255	***
環境配慮尺度4-B	0.472	***	0.481	***	0.363	***	0.231	***
環境配慮尺度5	0.510	***	0.506	***	0.415	***	0.235	***
環境配慮尺度6	0.552	***	0.513	***	0.447	***	0.358	***
環境配慮尺度7	0.462	***	0.437	***	0.388	***	0.247	***
環境配慮尺度8	0.567	***	0.546	***	0.463	***	0.304	***

n.s: not significant \*\*  $p<.005$  \*\*\*  $p<.001$

環境配慮尺度1:	安全と安心への支援配慮尺度
環境配慮尺度2:	見当識への支援配慮尺度
環境配慮尺度3:	機能的な能力への支援配慮尺度
環境配慮尺度4-A:	環境における刺激の質と調整への配慮尺度-A
環境配慮尺度4-B:	環境における刺激の質と調整への配慮尺度-B
環境配慮尺度5:	生活の継続性への支援配慮尺度
環境配慮尺度6:	プライバシーの確保への支援配慮尺度
環境配慮尺度7:	自己選択への支援配慮尺度
環境配慮尺度8:	入居者とのふれあいの促進への支援配慮尺度

## 7. 重回帰分析の結果

相関係数の値をもとに、ケア尺度との間に  $r=.200$  以上の相関関係がみられた環境配慮尺度を独立変数、ケア尺度を従属変数とする重回帰分析をステップワイズ法によって行い、従属変数に対して、影響を与えている独立変数について探索的に検討した結果、ケア尺度については、環境配慮尺度6 ( $\beta=.320$ )、環境配慮尺度8 ( $\beta=.361$ ) が影響を与えており、この2

つの変数によって説明されるケア尺度の説明率も  $R^2=.381$  と高かった。また、下位尺度である「利用者の興味をふまえた援助」と「利用者の人間関係と周辺環境の調整」でも環境配慮尺度6と環境配慮尺度8に影響が認められ、「利用者の興味をふまえた援助」については、説明率も  $R^2=.343$  と高かった。一方「自立への支援」については、環境配慮尺度6の影響のみが認められた ( $\beta=.358$ )。

表8 重回帰分析結果

	ケア尺度	興味・・・援助	人間関係・・・調整	自立への支援
環境配慮尺度1	—	—	—	非投入
環境配慮尺度2	—	—	+	非投入
環境配慮尺度3	—	—	—	非投入
環境配慮尺度4-A	—	—	—	—
環境配慮尺度4-B	—	—	—	—
環境配慮尺度5	—	—	—	—
環境配慮尺度6	0.320 ***	0.277 ***	0.254 ***	0.358 ***
環境配慮尺度7	—	—	—	—
環境配慮尺度8	0.361 ***	0.368 ***	0.300 ***	—
R	0.617 ***	0.586 ***	0.502 ***	0.358 ***
R2	0.381	0.343	0.252	0.128

—:ステップワイズ法によって分析から除外

+:多重共線性があったため分析から除外

\*\*\* p<.001

- 環境配慮尺度1: 安全と安心への支援配慮尺度  
 環境配慮尺度2: 見当識への支援配慮尺度  
 環境配慮尺度3: 機能的な能力への支援配慮尺度  
 環境配慮尺度4-A: 環境における刺激の質と調整への配慮尺度-A  
 環境配慮尺度4-B: 環境における刺激の質と調整への配慮尺度-B  
 環境配慮尺度5: 生活の継続性への支援配慮尺度  
 環境配慮尺度6: プライバシーの確保への支援配慮尺度  
 環境配慮尺度7: 自己選択への支援配慮尺度  
 環境配慮尺度8: 入居者とのふれあいの促進への支援配慮尺度

#### D. 考察

本研究では、システム論の立場から援助者を施設内における最も原子的なサービスシステムとして捉え、サービスとしてアウトプットされる痴呆性高齢者に対する専門的援助行為を測定する尺度として痴呆性高齢者専門的ケア尺度を独自に作成し、システムにとっての外的環境となる痴呆性高齢者に配慮された専門的環境との関係性について検討することを目的とした。

痴呆性高齢者専門的ケア尺度については、潮谷ら(2001)が開発した痴呆性高齢者環境配慮尺度の各次元について、当該次元から想定されるサービス機能を導出し、その機能を満たすための職員の援助行為を測定する33個の測定項目について、基本統計量、相関分析、因子分析を用いて、測定項目としての適正について検討した。その結果、尺度としての分布にも特に問題もなく、内的整合性についても十分に確保された尺度としての適正が高い尺度として、「利

用者の興味をふまえた援助」、「利用者の人間関係と周辺環境の調整」、「自立への支援」の3つの因子によって構成される15個の測定項目からなる「痴呆性高齢者専門的ケア尺度」を得ることができた。

また、痴呆性高齢者専門的ケア尺度とサービスシステムとしての職員にとっての外的環境となる痴呆性高齢者に配慮された専門的環境を測定する痴呆性高齢者環境配慮尺度の関係について、相関分析と痴呆性高齢者環境配慮尺度を独立変数、痴呆性高齢者専門的ケア尺度を従属変数とする重回帰分析によって検討した結果、痴呆性高齢者環境配慮尺度のうち、「プライバシーの確保への支援配慮尺度」と「入居者とのふれあいの促進への支援配慮尺度」との間に強い関係がみられた。さらに、下位尺度である「利用者の興味をふまえた援助」と「利用者の人間関係と周辺環境の調整」でも「プライバシーの確保への支援配慮尺度」と「入居者とのふれあ

いの促進への支援配慮尺度」との間に強い関係がみられ、「自立への支援」についても「プライバシーの確保への支援配慮尺度」との関係が認められた。

これらのことから、専門的環境と専門的な援助行為が決して独立ではなく、痴呆性高齢者にとって望ましいとされる専門的環境は、痴呆性高齢者の生活支援に寄与すると同時に、援助者の援助行為についても寄与しているということが示唆できた。特に、痴呆性高齢者専門的ケア尺度が測定しているような「利用者の興味をふまえた援助」、「利用者の人間関係と周辺環境の調整」、「自立への支援」に対するケアについては、痴呆性高齢者環境配慮尺度の「プライバシーの確保への支援配慮尺度」と「入居者とのふれあいの促進への支援配慮尺度」の測定内容からも、環境配慮による個別性の尊重とコミュニケーションの確保が円滑になるような専門的環境が重要になるということが考えられた。

最後に、今回調査に協力頂いた九州圏内の特別養護老人ホームの施設長様、職員様にこの場をかりて心より御礼申し上げます。

#### 文献

Grant, L. A. Assessing Environments in Alzheimer special care units: The Nursing Unit Rating Scale. *Research on Aging*, 18, pp.275-291, 1996.

児玉桂子『痴呆性高齢者環境評価尺度（住宅版・施設版）の開発と有効性に関する長期的評価研究』, 平成 11 年度～平成 12 年度科学研究費補助金基盤研究(B) (1) 研究成果報告書（課題番号：11450229, 研究代表者：児玉桂子）, 2001.

松永公隆、児玉桂子、足立 啓、下垣 光、潮谷有二、神谷愛子「アメリカにおける痴呆性高齢者のケアと環境評価尺度」, 『痴呆性高齢者環境評価尺度（住宅版・施設版）の開発と有効性に関する長期的評価研究』, 平成 11 年度～平成 12 年度科学研究費補助金基盤研究(B) (1) 研究成果報告書（課題番号：11450229, 研究代表者：児玉桂子） pp.31-39, 2001.

Sloane, P. D., & Mathew, L. J. The therapeutic environment screening scale. *American Journal of Alzheimer's Care and Research*, 5, pp.22-26, 1990.

Sloane, P. D., & Mathew, L. J. (Eds.) *Dementia Units in long-term care*. Baltimore, MD: Johns Hopkins University Press, 1991.

Sloane, P. D., Mitchell, C. M., Long, K., & Lynn, M. TESS 2+ Instrument B: Units Observation Checklist - Physical Environment. 1995, 未刊行（児玉桂子教授の研究会を通して独自に入手）.

潮谷有二、児玉桂子、足立 啓、下垣 光、松永公隆、神谷愛子、山口結花「痴呆性高齢者環境配慮尺度の尺度化と有効性」, 『痴呆性高齢者環境評価尺度（住宅版・施設版）の開発と有効性に関する長期的評価研究』, 平成 11 年度～平成 12 年度科学研究費補助金基盤研究(B) (1) 研究成果報告書（課題番号：11450229, 研究代表者：児玉桂子） pp.57-92, 2001.

Weisman, J., Lawton, M.P., Sloane, P.S., Calkins, M., & Norris-Baker, L. *The Professional Environmental assessment protocol*. Milwaukee, WI: School of Architecture, University of Wisconsin At Milwaukee, 1996.

## 付表 痴呆性高齢者環境配慮尺度（実施度）

### 〔安全と安心への環境配慮〕

- (1) 廊下や共用空間にいる痴呆のある入居者を、職員が見守りやすいような建物の構造になっている
- (2) 痴呆のある入居者のいる建物の出入り口は、職員が自然な形で監視しやすくなっている
- (3) ぶつかって転倒の原因となるようなカートやイスなどを、廊下に置かないようにしている
- (4) 滑りにくく、転倒してもけがをしないような床の材質になっている
- (5) ぶつかってもけがをしにくいように、家具やカウンターの縁が丸くなっている
- (6) 安全に介護をするために、トイレには十分なスペースが確保されている

### 〔見当識への環境配慮〕

- (7) 痴呆のある入居者が、居室やトイレなどの位置を分かりやすくするために、サインや絵などの目印を用いている
- (8) 痴呆のある入居者が、時間経過が分かるように、カレンダーや時計などを意図的に飾っている
- (9) 痴呆のある入居者が、その空間で行われる活動を思い起こしやすいように、家具やもので演出している
- (10) 痴呆のある入居者が、自分の部屋を分かりやすいように、インテリア（ベッドカバー、カーテンなど）に変化をつけている
- (11) 痴呆のある入居者が、時間的な感覚を持てるように、時間的な目印となる活動を設けている
- (12) 痴呆のある入居者が、迷わずに方向感覚をもちやすい廊下の作りになっている
- (13) 居住棟の生活空間や生活単位を少人数にグループ化している

### 〔機能的な能力への環境配慮〕

- (14) トイレを各居室に設けている
- (15) 食堂やデイルームなどの共用空間に近接して共用トイレを設けている
- (16) シャワーや入浴設備を各居室に設けている、または家庭的な小規模の浴室を設けている
- (17) 入居者が使いやすいような洋服ダンスが居室内に置かれている
- (18) 痴呆のある入居者が利用できる台所を設けている
- (19) 痴呆のある入居者が園芸を楽しめる場所が庭や屋上にある

### 〔環境における刺激の調整〕

- (20) 痴呆のある入居者が落ち着いて生活できるように、放送設備などの音量を低いレベルに抑えている
- (21) 痴呆のある入居者が落ち着いて生活できるように、共用空間でのテレビの音量や視聴時間を調整している
- (22) 居住棟のにおいを取り除く工夫をしている

### 〔環境における刺激の質〕

- (23) 落ち着いた音楽や会話などを痴呆のある入居者の日常生活の中に取り入れている
- (24) 痴呆のある入居者になじみのある時代や文化を反映する絵画などの装飾品を取り入れた環境づくりをしている
- (25) 色調、家具、床や壁など施設全体のインテリアは、統一がとれ、痴呆のある入居者に視覚的なミスマッチを感じさせないようにしている
- (26) 施設内には、痴呆のある入居者に生活を感じさせる香りがある（食べ物、コーヒー、新鮮な花の香りなど）
- (27) 痴呆のある入居者が昼夜の区別をしやすいように、照明は意図的に昼は明るく、夜は抑えている

### 〔生活の継続性への環境配慮〕

- (28) 痴呆のある入居者が居室に思い出の品や写真を飾れるようにしている
- (29) 居住棟の共用部分には、スチールなどの事務所的でない家庭的な家具が置かれている
- (30) 居住棟では家庭的な雰囲気を保つために、施設の機器（カート、収納棚）を目につきにくい場所に置いている
- (31) 入居者の家族が訪ねてきたときに、落ち着いて話ができる場所を用意している
- (32) 痴呆のある入居者の生活歴や興味のあることについて、スタッフが情報を共有している
- (33) 痴呆のある入居者が興味を持っていたことを、日常の活動の中に生かすようにしている
- (34) 痴呆のある入居者にあわせて、入浴方法、時間、温度などに配慮している

### 〔プライバシーの確保〕

- (35) 居室に入る前に、職員は扉をノックするようにしている
- (36) 痴呆のある入居者が居室の扉を閉めておくことを希望すれば、居室の扉を閉めることを認めている
- (37) 一日のうち何度か居室から出るように、痴呆のある入居者に働きかけている
- (38) 入浴時には、入居者のプライバシーへの配慮を十分行っている
- (39) 痴呆のある入居者が少人数で使用するのに適した食堂やデイルームがある

### 〔自己選択の機会への環境配慮〕

- (40) 痴呆のある入居者の希望を取り入れて、自分の着たい服を選べるようにしている
- (41) 痴呆のある入居者にあわせて、食事のメニューを選択できるようにしている
- (42) 痴呆のある入居者がいる場所を選択できるように、居住棟の各所にイスを置いている
- (43) 痴呆のある入居者や家族の希望により、相部屋か個室を選択できるようにしている
- (44) 痴呆のある入居者にあわせて、居室の温度、空気、明るさを容易に調節できるようにしている
- (45) 痴呆のある入居者にあわせて、寝る時間、入浴の時間を選択できるようにしている

### 〔入居者とのふれあいの促進〕

- (46) 玄関ホールや廊下に人が集まれるラウンジを設けている
- (47) 居住棟にさまざまな規模の交流の場を用意している（多くのイスが置かれた部屋、小グループ用の部屋など）
- (48) 主要な活動の場に隣接して、イスを配置して活動をながめることができるようにしている
- (49) デイルームやラウンジなどのイスは会話がしやすいように配置している
- (50) 痴呆のある入居者の社会的接触や交流を促進するさまざまなプログラムを用意している

## 環境配慮と職員の関わりが痴呆性高齢者の行動に及ぼす効果に関する研究

主任研究者 児玉桂子（日本社会事業大学教授）

研究協力者 秋葉直子（日本社会事業大学大学院）

分担研究者 潮谷有二（長崎純心大学助教授）

分担研究者 下垣光（日本社会事業大学専任講師）

これまで、痴呆性高齢者のための環境の重要性は言及されてきたが、施設環境や職員による関わりが、痴呆性高齢者に及ぼす影響を検証した研究はほとんど行われていない。本研究では、職員による関わりを測定する尺度および高齢者の表出行動を測定する尺度を作成し、環境配慮と職員の関わりが痴呆性高齢者の表出行動に及ぼす影響を検討した。その結果、環境配慮および職員の関わりが痴呆性高齢者の表出行動に大きな影響を及ぼしていることが示された。

### A. 研究の背景

高齢化の進行とともに、痴呆性高齢者数は年々増加しており、施設における痴呆性高齢者の割合は、特別養護老人ホーム利用者の90.4%、老人保健施設利用者の89.7%にも達する<sup>1</sup>。このような現状において、痴呆ケアの方向性の転換が図られている。

従来の痴呆性高齢者ケアは、大規模施設での画一的ケアであり、個人に合わせたケアというより、集団生活にいかに関わりを適応させるかが課題とされてきたと考えられる。これは、集団生活から外れた個人に問題があるとして、その原因を個人内に求めたものといえる。永田(1999)<sup>2</sup>はこれからの痴呆ケアは、問題の原因を「本人」のみではなく、「環境（空間、もの、周囲の人）」にもある、という、環境を重視した考えに移行すべきであるという見解を示している。環境とは、物理的環境の整備だけでなく、運営

面や社会的側面も含むものである。環境が痴呆性高齢者にもたらす影響として、Cohen&Weisman(1991)は、therapeutic environmentという言葉を使用している。痴呆性高齢者に相応しい環境、物理的環境だけではない、運営的・社会的側面を含めた環境の多面的要素が、高齢者の痴呆症状の進行を抑えるなどの状態の安定につながるというものである。

このような背景から、痴呆性高齢者のための施設環境を、物理的環境だけでなく、多面的要素から構成されるものと捉え、環境が痴呆性高齢者に及ぼす影響を実証的に研究していくことが、痴呆性高齢者の生活の質の向上に重要であると考えられる。

これまで、痴呆性高齢者を取り巻く施設環境を評価する尺度は非常に少ない。わが国では、冷水ら(1987)によって発表された「老研式特別養護老人ホームサービス評価法」などがあるが、

これは痴呆性高齢者のための環境を考慮したものではない。痴呆性高齢者のための環境評価尺度として、米国で開発された評価を参考に、潮谷ら(2001)によって「痴呆性高齢者環境配慮尺度」が開発されている。しかし、痴呆性高齢者が安定し、生き生きとした生活を送るためには、施設全体における環境配慮だけでなく、それらを個人に合わせてどのように配慮するかという職員による関与が重要である。このような環境を調整する存在としての職員の関わりを捉える尺度は、これまでになく、痴呆性高齢者のための環境に関する研究の課題といえる。

さらに、環境を調整して、個人に合わせるという役割だけでなく、職員の関わりそのものも環境要因の一つと考えられる。痴呆性高齢者への接し方、ケアの原則という形での指針は存在するが、上のような視点から、痴呆性高齢者に対する職員の関わりを評価する尺度はほとんどない。

次に、従来の痴呆性高齢者評価は、治療という視点からの痴呆の障害の程度を評価するものが中心であったといえる。痴呆の進行による障害の程度を把握することは、ケアや薬物の提供のためにも重要である。しかし、その一方で、進行性で非可逆性の痴呆という疾患を有した高齢者に残された機能を、評価する必要性もあるだろう。近年、痴呆性高齢者の主観的側面を評価しようとする取り組みが始まっている。例えば、Lawton(1994)<sup>3</sup>が開発した Philadelphia Geriatric Center Affect Rating Scale は、楽しみ、怒り、不安・恐れ、抑うつ・悲哀、関心、満足の6項目について、評価者が痴呆性高齢者本人と直接面接を行い、それぞれの項目がどの程度みられるのかを評価するものである。このような痴呆性高齢者の表出行動から、本人の主観を把握しようとする取り組みは、他にも QOL 評価の一部にみられる<sup>4, 5</sup>。

Lawton(1994)による評価では、痴呆の進行とともに、表出行動の減少がみられるとしている。しかし、経験的に、北欧等では、痴呆性高齢者に適切な環境において、高齢者が落ち着いて生活しているということが知られている。わが国でも、痴呆性高齢者に適切な環境が配慮されることによって、痴呆の進行に関わらず、安定し、生き生きとした生活ができるのではないかと考えられるが、そのような実証研究は非常に少ない。

## B. 研究の目的と方法

### 1. 研究目的

本研究では、以上の先行研究を踏まえ、施設環境配慮と職員の関わりが、痴呆性高齢者の表出行動に及ぼす影響を捉え、さらに環境配慮を行うことが、痴呆の重症度に関わらず、肯定的な表出行動の維持に寄与することを明らかにすることを目的とする。また、痴呆性高齢者への職員の関わりを測定する尺度や痴呆性高齢者の表出行動を測定する尺度が、わが国ではほとんどみられないため、これら尺度の開発も本研究の目的とする。

以上のような目的に従って二つの分析の視点を設定した。

- ①「痴呆性高齢者環境配慮尺度」によって、捉えられる施設環境配慮、及び「基本的関わり尺度」「専門的ケア尺度」によって捉えられる職員の間わりは、痴呆性高齢者の表出行動に大きな影響を及ぼすことが予想される。
- ②上記施設環境と職員の間わりは、痴呆の重症度よりも大きな影響を痴呆性高齢者の表出行動に及ぼすことが予想される。

### 2. 研究方法

#### 1) 調査対象

本研究では、2000年度に潮谷ら<sup>6</sup>によって行われた、痴呆性高齢者環境配慮尺度調査に回答

した施設を対象に協力依頼を行った。潮谷らは、全国老人福祉施設要覧平成10年度版の中から、無作為に2000施設を抽出し、自計式の郵送調査法を実施し、476票を回収した。本調査では、その中から、施設名が不明である17施設を除いた459施設を対象として、調査依頼通知、返信はがきを送付した。調査に協力可能、調査票を見た上で回答、に○をつけて返信された169施設に調査票を送付した。そのうち、調査票が回収された施設は118施設(回収率69.8%、459施設中25.7%)であった。施設の種類の特別養護老人ホームが95.8%、送付した施設と関連のあるグループホームが4.2%であった(表1)。

調査を依頼した各施設に入所している痴呆性高齢者の中から、職員の働きかけに反応のあることを基準として、各施設5~10名の痴呆性高齢者の選出を依頼した。痴呆性高齢者調査は862ケースの回答が得られた(表2)。

表1 回答施設の入居者

項目	区分	割合/平均±標準偏差
入居者定員		67.22±31.12(5-200)
	GH除去後	69.87±29.07(30-200)
入居者数	男性	21.6%
	女性	78.5%
年齢	60歳代	0%
	70~74歳	0%
	75~79歳	14.7%
	80~84歳	21.2%
	85歳以上	51.3%
要介護度	要支援	0.0%
	要介護度1	10.1%
	要介護度2	15.1%
	要介護度3	18.0%
	要介護度4	26.5%
	要介護度5	28.4%
痴呆性高齢者割合		73.9%

表2 調査対象者

項目	区分	平均、%
年齢		84.62±7.22(62-99)
性別	男性	18.9%
	女性	80.3%
要介護度	要介護度1	6.6%
	要介護度2	16.6%
	要介護度3	25.8%
	要介護度4	28.5%
	要介護度5	15.7%
	その他	0.1%
利用期間		41.68±38.96(1-270)

## 2) 調査方法

調査票は、A・Bの2種類からなる。施設環境調査(調査票A)は、施設概要と「痴呆性高齢者環境配慮尺度」からなり、一施設に1部送付した。痴呆性高齢者調査(調査票B)は、「NMスケール」「痴呆性高齢者基本的関わり尺度」「痴呆性高齢者専門的ケア尺度」「肯定表出行動」「不穏表出行動」からなり、一施設に10部送付した(表3)。尺度の詳細は結果で述べる。調査票A・Bともに自計式の郵送調査法により行った。調査票は2001年10月1日より調査協力可能な返信はがきが届いた施設から順次発送し、回収は2001年10月20日から11月19日までであった。

表3 本研究で用いた尺度

調査票	尺度名	下位尺度
調査票 A	痴呆性高齢者環境配慮尺度	安全と安心への支援、見当識への支援、機能的な能力への支援、環境における刺激の質と調整、生活の継続性への支援、プライバシーの確保、自己選択への支援、入居者とのふれあいの促進
調査票 B	NMスケール	家事・身辺整理、関心・意欲・交流、会話、記憶・記憶、見当識
	痴呆性高齢者基本的関わり尺度	
	痴呆性高齢者専門的ケア尺度	生活歴の理解と交流促進、自己選択と自立への支援、利用者周辺環境の調整
	肯定表出行動尺度	
	不穏表出行動尺度	怒り、不安、反応の低下

測定方法は「痴呆性高齢者環境配慮尺度」については「かなり実施されている」を4点~「全く実施されていない」を1点とした。「痴呆性高齢者基本的関わり尺度」「痴呆性高齢者専門的ケア尺度」については、同様に「いつもしている」4点~「全くしていない」1点、「肯定表出行動尺度」「不穏表出行動尺度」については、「よくみられる」4点~「全くみられない」1点とした。なお、分析については、表3における各尺度の全ての項目に欠損値を有しない116施設、678ケースを対象とした。

## 3) 分析方法

### 1. 尺度化に関する分析方法

各尺度の項目について、平均値、標準偏差、

歪度、尖度の統計量を算出し、各々の項目の分布から測定項目としての適正について検討した。その際に、歪度と尖度の絶対値が 1.96 を超える項目を分析除外対象項目とすることを原則とした。

次に、尺度ごとに内的整合性による信頼性係数 (Cronbach's  $\alpha$ ) を算出し、さらに因子分析を行い尺度の構造について検討した。因子分析の結果、項目間の相関行列と因子負荷行列を観察し、他の項目との相関関係が弱い項目や因子負荷量の最大値が絶対値で 0.4 以下の項目を除外し、信頼性係数の算出を行い再度因子分析を行い、測定項目の選択をした。尚、因子分析では、主因子法による因子軸の抽出を行い、因子数は固有値 1.0 以上とし、因子軸の回転にはバリマックス回転を行った。

## 2. 痴呆性高齢者の表出行動に影響を及ぼす要因に関する重回帰分析

①「痴呆性高齢者環境配慮尺度」の各次元(8次元)の合計点を算出し、それをもとに 116 施設の順位付けを行った。1 から 116 まで順位付けされた「痴呆性高齢者環境配慮尺度」の順位によって、3 グループに分類された。環境高配慮群(39 施設)、環境中配慮群(39 施設)、環境低配慮群(38 施設)である。要因分析は、環境配慮 3 群別に行った。

②「NM スケール」「痴呆性高齢者基本的関わり尺度」「痴呆性高齢者専門的ケア尺度」「肯定表出行動尺度」「不穏表出行動尺度」について、環境配慮別にピアソンの積率相関係数を算出し、尺度間の関係について検討した。

③「NM スケール」「痴呆性高齢者基本的関わり尺度」「痴呆性高齢者専門的ケア尺度」を独立変数とし、「肯定表出行動尺度」「不穏表出行動尺度」を従属変数として、環境配慮別に重回帰分析を行い、項目間の影響の大きさについて検討した。独立変数として投入する変数は、尺度間

の相関行列に基づいて絞り込み、強制投入法によって分析を行った。

## C. 研究結果

### 1. 尺度化のための項目分析および因子分析

「NM スケール」、「痴呆性高齢者基本的関わり尺度」11 項目、「痴呆性高齢者専門的ケア尺度」27 項目、「肯定表出行動尺度」8 項目、「不穏表出行動尺度」9 項目について、平均、標準偏差、歪度・尖度を算出した。歪度・尖度で絶対値が 1.96 を超えていた項目は、「NM スケール」の家事・身辺整理、「痴呆性高齢者基本的関わり尺度」の間 3-9、「痴呆性高齢者専門的ケア尺度」の間 4-27 であった (表省略)。

①「NM スケール」は、家事・身辺整理の尖度が 3.08 と偏りがあったが、家事は NM スケールの他の項目との相関も高く (表省略)、因子分析の結果、因子負荷量も他の項目と同等であったため、家事・身辺整理、関心・意欲・交流、会話、記銘・記憶、見当識の 5 項目の合計得点を算出し、NM スケール得点とした。5 項目の信頼性係数は  $\alpha = .8848$  であった。

②「痴呆性高齢者基本的関わり尺度」11 項目において、分布に偏りのみられた項目を除く 10 項目の信頼性係数は  $\alpha = .8542$  であった。因子分析の結果、一つの因子が抽出された (表省略)。

表 4 痴呆性高齢者基本的関わり尺度項目

	項目
問 3-1	A さんに対して、ゆったりとした雰囲気や態度で言葉かけや関わりをしている
問 3-2	A さんの楽しさや喜びを引き出すような言葉かけや雰囲気づくりを意識的に行っている
問 3-3	言語だけでなく、A さんが理解できるような手法を用いてコミュニケーションを取るようになっている
問 3-4	A さんの可能性を常に引き出すようにしながら援助している
問 3-5	A さんの話に耳を傾け、受け入れるようになっている
問 3-6	A さんと話をするときは、視線を同じ高さに合わせるようになっている
問 3-7	A さんと一緒に新聞を読んだり、テレビを見たりなど一緒に過ごす時間を作るようになっている
問 3-8	A さんが間違った行動をとっても、危険を伴わなければ否定せず、受け入れ、そっと補うようになっている
問 3-10	A さんに話しかけたり行動を共にするときには、タイミングを見ながら、A さんのペースに合わせて行動するようになっている
問 3-11	A さんに話しかけられたときには、他の用事の途中でであっても、できる限り耳を傾けることを優先している



項目間の相関をみても削除すべき項目はなかったため、10項目によって測定される尺度を「痴呆性高齢者基本的関わり尺度」とした(表4)。

③「痴呆性高齢者専門的ケア尺度」において、歪度と尖度から偏りのある項目や、相関行列から他との相関があまりみられない項目を除き、探索的因子分析を行った。因子負荷量が0.4に満たない項目は削除し、再び因子分析を行った結果、3つの因子が抽出された(表5)。第1因子「生活歴の理解と交流促進」8項目の信頼性係数は $\alpha = .8327$ 、第2因子の「自己選択と自立への支援」6項目は $\alpha = .7986$ 、第3因子の「利用者周辺環境の調整」4項目は $\alpha = .7046$ といずれも高い値であった。痴呆性高齢者専門的ケア尺度全体では $\alpha = .8858$ であった。

表5 「痴呆性高齢者専門的ケア尺度」の項目

項目	
第1因子	生活歴の理解と交流促進
問4-4	Aさんが庭やベランダに出て、季節感や自然の空気を感ぜられるようにしている
問4-19	Aさんの行動範囲を施設内だけに限定するのではなく、外に散歩に出たり、地域との交流を図るようにしている
問4-2	Aさんが花や植物に触れられるようにしている
問4-6	Aさんの興味のあることを、施設内での活動や役割などに生かしている
問4-8	Aさん自身の思い出の品や写真を話題に取り入れた会話をしている
問4-1	Aさんになじみのある時代や文化を反映したものを施設内に置いている
問4-7	Aさんの生活歴や興味のあることを、他のスタッフと情報を共有している
問4-18	施設内にある小道具を利用してAさん他の入居者の交流を図っている
第2因子	自己選択と自立への支援
問4-24	排泄や入浴をなるべく自分でできるように配慮している
問4-13	Aさんが毎朝自分の希望に合った衣服を選ぶようにしている
問4-25	Aさんが衣服の整理をできるように、タンスなどを使いやすく工夫している
問4-14	日常のレクリエーション活動には、Aさんの意思を尊重して、参加したりしなかったりの選択ができるようにしている
問4-15	毎日の起床と就寝時間などは、ある程度Aさんの希望を取り入れている
問4-23	居室やトイレなどが分かるように、サインや絵などの目印を活用している
第3因子	利用者周辺環境の調整
問4-17	Aさん他の入居者の人間関係に気を配りながら接している
問4-26	Aさんにとって施設内の音が不快な場合、例えば、大きすぎるテレビの音、他の入居者の大声、にすぐに対応している
問4-20	他の利用者に接しているときにも、Aさんが視野に入っている
問4-3	Aさんが昼夜の区別をしやすいように、室内の明るさに気を配っている

④「肯定表出行動尺度」8項目のうち、偏りのある項目はなく、信頼性係数は $\alpha = .8739$ であった。8項目で因子分析を行った結果、抽出された因子は1つであった。信頼性係数も高く、

項目間の相関行列をみても削除する項目がなかったため(表省略)、8項目によって測定される尺度を「肯定表出行動尺度」とした(表6)。

表6 肯定表出行動尺度項目

項目
問5-1 ほほえみや笑いの表情がみられる
問5-2 明るく楽しそうな様子がみられる
問5-3 食事を楽しむ様子がみられる
問5-4 人の話や活動をながめて楽しむ様子がみられる
問5-5 動物(ペット)や植物に興味を示す様子がみられる
問5-6 音楽・テレビを楽しむ様子がみられる
問5-7 安心している表情がみられる
問5-8 くつろいだ表情がみられる

⑤「不穏表出行動尺度」において偏りのある項目はなく、9項目の信頼性係数は $\alpha = .7400$ であった。9項目で因子分析を行った結果、3因子が抽出された。想定していた不穏表出行動の下位概念「怒り」「反応の低下」「不安」の通りに分類されたので、第1因子は「怒り」、第2因子は「不安」、第3因子は「反応の低下」と名付けた。第1因子の信頼性係数は $\alpha = .8270$ 、第2因子は $\alpha = .7431$ 、第3因子は $\alpha = .7250$ であった(表7)。

表7 「不穏表出行動尺度」の項目

項目
怒り
問5-9 大声で叫んだりわめいたりする様子がみられる
問5-10 人に手を出したり、振り払ったりする様子がみられる
問5-11 しかめっ面をするなど、怒りの表情がみられる
不安
問5-15 周囲を気にして、落ち着きがない様子がみられる
問5-16 緊張した表情がみられる
問5-17 居場所がないような感じで動き回っている様子がみられる
反応の低下
問5-12 長時間ぼんやり過ごしている様子がみられる
問5-13 周囲の人に無関心な様子がみられる
問5-14 職員の話し掛けに対する反応が低下している

## 2. 痴呆性高齢者の表出行動に影響を及ぼす要因に関する重回帰分析

環境高配慮群では、肯定表出行動に影響を及ぼしていたのは、「NMスケール」( $\beta = .341$ )「基本的関わり」( $\beta = .172$ )「生活歴の理解と交流促進」( $\beta = .283$ )であった。重相関係数は0.556であり、決定係数は0.309であった。不安の表出行動に影響を及ぼしていた変数は、「基本的関わり」

( $\beta = -.149$ )のみであった。重相関係数は 0.149、決定係数は 0.022 と低い値であった。反応の低下に影響を及ぼしていた変数は「自己選択と自立への支援」( $\beta = -.301$ )「利用者周辺環境の調整」( $\beta = -.174$ )であった。NM スケールは、重回帰分析の結果、多重共線性がみられたため、除いて分析をおこなった。重相関係数は 0.399、決定係数は 0.159 であった。

表 8 表出行動と関連諸要因との重回帰分析 (環境高配慮群)

	標準偏回帰係数( $\beta$ )、相関係数( $r$ )							
	肯定表出行動		不穏表出行動				反応の低下	
	$\beta$	$r$	怒り		不安		$\beta$	$r$
NMスケール	.341 ***	.381 ***	—	-.094	—	-.016	—	-.550 ***
基本的関わり	.172 *	.376 ***	-.068	-.156 *	-.149 *	-.149 *	-.064	-.259 ***
理解と交流	.283 ***	.438 ***	-.035	-.154 *	—	-.002	.081	-.223 ***
自己選択	-.143	.329 ***	-.133	-.189 **	—	-.008	-.301 ***	-.362 ***
環境の調整	.126	.294 ***	—	-.043	—	-.033	-.174 *	-.300 ***
重相関係数(R)	.556 ***	—	.203 *	—	.149 *	—	.399 ***	—
決定係数(R <sup>2</sup> 乗)	.309	—	.041	—	.022	—	.159	—

\*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

環境中配慮群では、肯定表出行動に影響を及ぼすのは、「NM スケール」( $\beta = .219$ )「基本的関わり」( $\beta = .183$ )「生活歴の理解と交流促進」( $\beta = .218$ )であった。重相関係数は 0.485 であり、決定係数は 0.235 であった。不安の表出に影響を及ぼしていた変数は、「生活歴の理解と交流促進」( $\beta = -.145$ )のみであった。反応の低下に影響を及ぼしていた変数は「自己選択と自立への支援」( $\beta = -.218$ )であった。NM スケールについては、相関は高かったものの、多重共線性がみられたため、分析から除いた。

表 9 表出行動と関連諸要因との重回帰分析 (環境中配慮群)

	標準偏回帰係数( $\beta$ )、相関係数( $r$ )							
	肯定表出行動		不穏表出行動				反応の低下	
	$\beta$	$r$	怒り		不安		$\beta$	$r$
NMスケール	.219 **	.312 ***	—	-.093	—	-.031	—	-.480 ***
基本的関わり	.183 *	.335 ***	—	.010	—	-.049	—	-.075
理解と交流	.218 **	.384 ***	—	-.065	-.145 *	-.145 *	—	-.086
自己選択	.115	.377 ***	—	-.088	—	.035	-.218 ***	-.218 ***
環境の調整	-.078	.278 ***	—	.118	—	-.023	—	-.119
重相関係数(R)	.485 ***	—	—	—	.145 *	—	.218 ***	—
決定係数(R <sup>2</sup> 乗)	.235	—	—	—	.021	—	.048	—

\*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

環境低配慮群では、肯定表出行動に影響を及ぼすのは、「NM スケール」( $\beta = .168$ )「基本的関わり」( $\beta = .222$ )であった。重相関係数は 0.505 であり、決定係数は 0.255 であった。痴呆性高齢者の怒りの表出に影響を及ぼすのは、「NM

スケール」( $\beta = -.140$ )のみであった。不安の表出に影響を及ぼすのは、「自己選択と自立への支援」( $\beta = .165$ )のみであった。反応の低下に影響を及ぼすのは、「NM スケール」( $\beta = -.378$ )「自己選択と自立への支援」( $\beta = -.213$ )であった。重相関係数は 0.525 であり、決定係数は 0.276 であった。

表 10 表出行動と関連諸要因との重回帰分析 (環境低配慮群)

	標準偏回帰係数( $\beta$ )、相関係数( $r$ )							
	肯定表出行動		不穏表出行動				反応の低下	
	$\beta$	$r$	怒り		不安		$\beta$	$r$
NMスケール	.168 *	.259 ***	-.140 *	-.140 *	—	.032	—	-.378 ***
基本的関わり	.222 *	.445 ***	—	-.016	—	.073	—	-.185 **
理解と交流	.131	.406 ***	—	-.007	—	-.009	.030	-.202 **
自己選択	.010	.294 ***	—	-.090	.165 *	.165 *	—	-.213 **
環境の調整	.149	.382 ***	—	.036	—	.110	—	-.131
重相関係数(R)	.505 ***	—	.140 *	—	.165 *	—	.525 ***	—
決定係数(R <sup>2</sup> 乗)	.255	—	.020	—	.027	—	.276	—

\*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

## D. 考察

### 1. 痴呆性高齢者の表出行動に影響を及ぼす環境要因

重回帰分析の結果から、肯定表出行動に及ぼす環境の影響は、高・中配慮群と低配慮群で違いがみられた。その理由として、環境配慮が十分でない施設では、痴呆性高齢者個人のこれまでの生活に配慮したさまざまなものや、五感に働きかけるようなものを使った関わりをすることが困難であるからということが考えられる。様々な小道具、馴染みのもの、季節感を感じられるもの、等が用意されていてはじめて、それを痴呆性高齢者との関わりの中で話題にしたり提供することができるといえる。

「不安」の表出と関連がある職員の関わりは環境配慮の程度によって多様であった。環境配慮のいずれの群も不安に及ぼす職員の関わりについての標準偏回帰係数はそれほど大きい値とはいえない。しかし、環境高配慮群と中配慮群では、職員の関わりが大きいほど、「不安」の表出得点は低いという結果が示されたが、環境低配慮群のみ、「自己選択と自立への支援」がなされるほど不安表出が高いという結果が得られた。これは、環境への配慮が十分でない施設におい

て、個人の自立を促すような支援や自己選択を促すことは、一方的な支援をしてしまうことが予想され、それが不安と結びつくと推察される。職員が痴呆性高齢者に自立や自己選択を促すような支援をするためには、そのための環境が整っていることが必要であることが示唆される。

「反応の低下」の表出は環境配慮のいずれの群においても、「自己選択と自立への支援」がなされるほど反応の低下がみられなくなることが示された。しかし、「反応の低下」については環境の高・中配慮群で多重共線性がみられ、痴呆の影響をコントロールできなかったため、「自己選択と自立への支援」の影響の強さについては、その痴呆の重症度が及ぼす影響から何とも結論づけることは難しい。つまり、「自己選択と自立への支援」と痴呆の重症度を測る NM スケールとの相関が非常に高く、自己選択や自立を促すことが可能である対象者は痴呆が軽度であり、そのため反応の低下もみられないという可能性も考えられる。しかし、環境低配慮群においては、痴呆の影響をコントロールした条件の下で、「自己選択と自立への支援」が反応の低下に影響を及ぼすことが明らかになっており、個人の自立を促すという刺激が痴呆性高齢者の反応の低下を防ぐ要因になると考えられる。

本調査の目的の一つは、痴呆性高齢者をとりまく環境が、痴呆性高齢者の表出行動に及ぼす影響を検証することであったが、その影響は認められた。痴呆の重症度の影響をコントロールした条件下において、上述したように職員の関わりが表出行動に及ぼす影響が大きいことが明らかにされた。また、環境配慮別分析の結果を比較すると、環境配慮の程度により、職員の関わりが表出行動に異なる影響を及ぼしている点から、環境の影響も認められる。

## 2. 痴呆性高齢者の表出行動に影響を及ぼす痴

### 呆の重症度と環境との関連

痴呆性高齢者の表出行動には、痴呆の重症度よりも、環境の影響が大きいという視点で重回帰分析を行った。「肯定表出行動」に及ぼす痴呆の重症度の影響は、環境高配慮群、中配慮群、低配慮群において、職員による関わりの影響をコントロールした条件下において、いずれも有意に影響があるという結果となった。

また、環境低配慮群では、痴呆の重症度は「怒り」の表出に影響を及ぼしていた。環境の配慮が十分でない施設で生活する事は、馴染みの生活とのずれが大きいことを意味する。その結果として、痴呆性高齢者にとってそのような環境は混乱を引き起こし、時には叫ぶなどの施設への不適応行動へと発展する可能性があるといえる。環境への配慮がなされている群では、より家庭的な環境づくりがなされ、これまでの痴呆性高齢者の生活を重視するような環境配慮がなされることによって、重度の痴呆性高齢者も落ち着いた生活が可能となっていると考えられる。環境低配慮群にのみ、「怒り」の表出がみられることは、環境の要因による影響は少なからずあるといえるだろう。

「反応の低下」の表出については、いずれの環境配慮群においても、痴呆の重症度との相関は高かった。多重共線性がみられたため、高・中配慮群では痴呆の重症度の影響を検討することはできなかった。しかし、低配慮群では痴呆の重症度の標準偏回帰係数は高く、職員の関わりによる影響をコントロールした条件の下で、その影響が高いことが示された。「反応の低下」の項目は、「ぼんやりしている」や、「周囲の人に無関心である」などの痴呆の進行による影響の大きい項目からなるため、痴呆の重症度との関連が大きくなることは十分考えられる。以上のように、痴呆性高齢者の表出行動には、痴呆の重症度よりも環境からの影響が大きいのでは

ないかという視点で分析を行った。そのような結果を得ることは全体的にはできなかったが、一部環境の要因も無視できない点も認められた。

わが国の痴呆性高齢者のための環境は、職員による関わり、物理的環境、施設の運営方針、社会的環境等、多くの側面で課題を残す。本研究では、痴呆の重症度が表出行動へ及ぼす影響は否めなかったが、適切な環境が配慮されることによって、痴呆が進行しても安定した、生き生きとした生活を送ることが可能になると考えられる。今後は、本研究のような郵送調査による数量的実証研究だけでなく、個々の施設での環境の質や痴呆性高齢者のノンバーバルな表出行動の観察等の事例的実証研究が必要といえるだろう。それによって、痴呆性高齢者がよりよい生活を送る上での環境づくりに貢献することができるだろう。

## E. 結論

本研究で明らかになったのは以下の点である。

- ① 痴呆の重症度をコントロールした条件の下で、職員の関わりが痴呆性高齢者の表出行動に及ぼす影響が大きいことが明らかになった。とくに、環境高・中配慮群において、「肯定表出行動」へは、「基本的関わり」と「生活歴の理解と交流促進」の影響が顕著であることが示された。また、環境低配慮群において、職員による「自己選択と自立への支援」が「反応の低下」の表出行動を抑える効果を示した。

「痴呆性高齢者環境配慮尺度」で捉えた施設環境については、環境配慮別分析の結果を比較すると、環境配慮の程度により、職員の関わりが表出行動に異なる影響を及ぼしている点から、影響のあることが示唆された。

- ② 痴呆の重症度は、痴呆性高齢者の肯定表出行動を減少させ、反応の低下を高めることが明らかになった。しかし、環境配慮別に「怒り」の表出に差が見られたこと、また、①から職員の関わりの影響が大きいことが明らかになったため、環境による影響も少なからず認められた。

Cohen&Weisman(1991)<sup>7)</sup>は、痴呆性高齢者を取りまく環境について、物理的・運営的・社会的環境が相互に関連しあい、痴呆性高齢者に影響を及ぼすと述べているが、それを実証するための十分な研究には至っていなかった。本研究では、Cohen&Weisman(1991)の上記理論を実証する結果が得られたといえる。

最後に本研究が痴呆性高齢者のための環境とケアの発展に寄与する点について、まとめたい。本研究では、これまでほとんど実証的に研究されてこなかった、痴呆性高齢者のための施設環境配慮および職員の関わりについて、具体的に項目を提示した評価尺度を作成し、実証研究を行った。それにより、施設における新しいケア実践に生かせる成果が得られた。

また、本研究では、施設環境配慮と職員の関わりの方の重要性を指摘することができた。現在、痴呆性高齢者のためのグループホームやユニットケア施設等が急速に増加してきている。しかしながら、これらの施設における物理的環境特性を生かして、より質の高いケアを提供するには、本研究で明らかにした施設環境配慮と職員の関わりを考慮する必要があることが実証された。

痴呆性高齢者ケアは、痴呆性高齢者自身のよりよい生活を目指すものである。本研究は、痴呆性高齢者ケアの今後の方向性として、痴呆性高齢者が安定し、生き生きと生活することができるための環境配慮と職員の関わり的重要性について指摘し、目指すべき方向性を示唆するこ